

老人の生活構造(II)

——「東京都老人福祉基礎調査」の結果から——

高橋 紘 士

前号では、老人の生活構造が、老化の進行とともに、自立性の喪失と依存性の増大という特徴をもつようになること、また、経済状況、家族の状況、住生活等によって生活構造に差異が存在することをみてきた。今回は、老人の人間関係、余暇生活、生活意識を中心に老人の生活構造の特徴について論ずることにしたい。

I 老人の人間関係

——家族と社会関係——

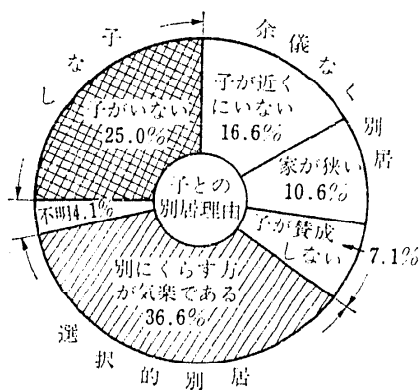
老人の人間関係を主として家族における親子関係、社会における近隣、友人との関係を中心としながらみていくことにしたい。

老化の進行は家族内における地位、役割を変化させるが、これは、子供の結婚による独立および配偶者との死別等を契機とする。そして、これら配偶者および子供との関係が、老人の居住形態 (Living Arrangement) を規定するのである。

配偶者との関係については、前号で簡単にふれておいたので、ここでは子との関係を中心に老人の家族内の人間関係について述べることにしたい。

子との関係でははじめに取上げなければならないのは

図 1 子との別居理由 (別居者)



同別居関係である。1人ぐらしと老人夫婦のみの世帯を別居世帯とし、別居理由を調べてみると、図1のように、四分の1の25%は子なしであるが、子供がありながら別居する理由では、「別にくらすほうが気楽」というのが36.6%、そして「子が近くにいない」とか「家が狭い」という物理的な理由をあげる人が27.2%、「子が賛成しない」という子との心理的な関係を理由とあげる人が7.1%である。

この別居形態は、「配偶者なし」よりは「あり」に、年齢階級が高い人よりは低い人に、健康状態が悪い人よりは良い人に、無業者よりは有業者に、本人所得が低い人よりは高い人に、持家よりは非持家に多いという傾向がみられる。

子との別居理由を家族類型別にみると(表1)「1人

表 1-(1) 家族類型別にみた子との別居理由 (別居者) (%)

	計	子がい ない	子が近 くにい ない	家が狭 い	子が賛 成しな い	別に暮 す方が 気楽で ある	不明
計	100.0 (1,287)	25.0	16.6	10.6	7.1	36.6	4.1
1人暮らし の世帯	100.0 (362)	38.1	12.7	5.8	5.2	35.2	3.0
老人夫婦 のみの世 帯	100.0 (925)	19.9	18.2	12.5	7.9	37.0	4.5

表 1-(2) 課税状況別にみた子との別居理由 (別居者) (%)

	計	子がな い	子が近 くにい ない	家が狭 い	子供が 賛成し ない	別に暮 す方が 気楽で ある	不明
計	100.0 (1,287)	25.0	16.6	10.6	7.1	36.6	4.1
生活保 護受給	100.0 (57)	42.1	5.3	14.0	17.5	15.8	5.3
所得税 非課税	100.0 (524)	30.0	14.5	10.5	7.3	34.6	3.1
所得税 課税	100.0 (656)	20.4	19.2	10.7	6.1	38.9	4.7

(注) 「課税状況」の不明は除く。

ぐらしの世帯」では「子がない」が最も高い比率を示しているが、「老人夫婦」の場合、「子がない」の比率は低くなり、その代りに、「子が近くにいない」とか「家が狭い」という理由によるものの比率が高くなっている。また、「別にくらす方が気楽」はそれぞれ 35% 以上を占めている。また、課税状況別にみると、所得税課税階層に比べ、非課税および生活保護受給者に比率が高い別居理由は「家が狭い」、「子供が賛成しない」そして「子がない」で所得税課税階層に多いのは、「子が近くにいない」および「別にくらすほうが気楽である」である。このように別居理由によって経済階層に差がみられるのは興味深い。

それでは別居者が子と同居を希望しているかどうかについては、子なしを除けば、「別にくらしたい」が最も多く、「同居したい」がそれに次ぎ、「近くに住めれば別居」、「同居だが家計は別」の順となっている。ところが別居理由別では「別にくらすほうが気楽」で別居希望が

図 2 子との同居希望 (別居者)

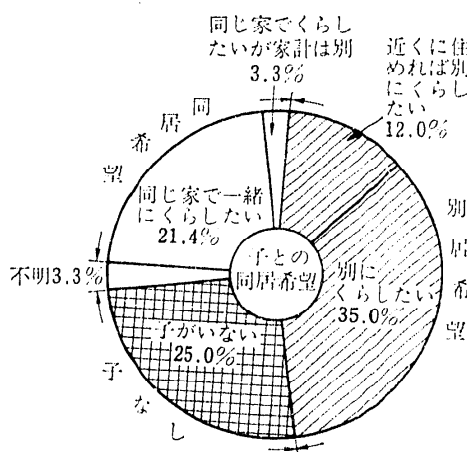


表 2 子との往来に要する時間 (別居者)

		計						
		(% 人)						
	計	10分未満	10分～30分未満	30分～1時間未満	1時間～1時間半未満	1時間半以上	子がいない	不明
		(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)	(%)
計	100.0 (1,287)	18.5	12.9	16.6	20.9	3.7	25.0	2.4
子なしと不明を除く	[100.0]	[25.4]	[17.8]	[22.9]	[28.8]	[5.1]	—	—

表 3 子との接触頻度 (別居者)

(% 人)							
	計	ほとんど毎日	週1回以上	月1回～2回	ほとんどない	子がいない	不明
計	100.0 (1,287)	21.2	17.4	24.3	10.2	25.0	1.9
子なしと不明を除く	[100.0]	[29.0]	[23.8]	[33.2]	[14.0]	—	—

表 4 健康状態別にみた子との接触頻度 (別居者) (% 人)

	計	ほとんど毎日	週1回以上	月1回～2回	ほとんどない	子がいない	不明
計	100.0 (1,287)	21.2	17.4	24.3	10.2	25.0	1.9
非常に健康	100.0 (302)	21.5	17.5	26.2	7.6	24.2	3.0
普通	100.0 (631)	24.0	17.9	23.1	10.0	23.9	1.1
弱い	100.0 (298)	15.8	16.8	25.2	12.8	28.7	0.7
床につききり	100.0 (48)	16.7	12.5	25.0	14.6	22.9	8.3
不明	100.0 (8)	25.0	25.0	12.5	—	12.5	25.0

表 5 健康状態別にみた泊りがけでの子との往来 (別居者) (% 人)

	計	ある	ない	子がいない	不明
計	100.0 (1,287)	40.1	32.6	25.0	2.3
非常に健康	100.0 (302)	42.7	30.8	24.2	2.3
普通	100.0 (631)	43.0	31.5	23.9	1.6
弱い	100.0 (298)	34.6	35.2	28.9	1.3
床につききり	100.0 (48)	20.8	48.0	22.9	8.3
不明	100.0 (8)	37.5	—	12.5	50.0

8割を越える以外、同居希望がほぼ過半数となっている。

それでは別居の子との関係はどうであろうか、子供たちとの時間距離は表2の通りである。「子なし」と「不明」を除いた百分率でみると、10分未満が 25.4%、30分未満が 17.8% で、1時間以上は 39.9% となっている。また、子との接触頻度は表3の通りで「ほとんど毎日」接触している人は 29.0% もみられるものの「ほとんどない」も 14.0% いる。ここで注目すべきは、「配偶者あり」よりも「なし」の場合に「ほとんど接触がない」の比率が高いこと。また、表4に示したように、健康状態が良い場合には接触頻度が密で、健康状態が悪化するも、逆に、「接触がほとんどない」の比率が高くなること。また、外出歩行能力でも同様の傾向が見られること等である。これは、健康状態で依存性が高くなっているにもかかわらず、別居の場合、必しも子供が面倒をみるのが常であるとは限らないことを示しているのである。このことは子供との往来(泊りがけの往き来)にも同様で(表5)、従来のように依存性の増大が、子による私

表 6 健康状態別にみた緊急時の援助者 (別居者)

(% 人)

		計	援助者あり	子・孫	嫁	親せき	近所の人 知人	家政婦、 お手伝い さん	援助者なし	不明
計		100.0 (1,287)	74.6	37.5	8.3	11.0	10.2	7.6	21.8	3.6
健康状態	非常に健康	100.0 (302)	72.2	38.7	8.3	10.3	8.6	6.3	23.5	4.3
	普通	100.0 (631)	78.2	40.4	8.6	12.4	8.7	8.1	19.3	2.5
	弱い	100.0 (298)	69.5	32.6	7.7	9.4	13.1	6.7	27.5	3.0
	床につききり	100.0 (48)	79.2	25.1	10.4	8.3	20.8	14.6	12.5	8.3
	不明	100.0 (8)	50.0	25.0	—	—	12.5	12.5	—	50.0

表 7 性・年齢階級別にみた子への手助け (1位) (同居者)

(% 人)

		計	している	留守番 や店番	孫の 話	縫いもの やつくり	食事のし たかたづ け	庭やすま いの手入 れ	洗濯・掃 除・その 他の家事	冠婚葬 祭のつき あい	その他	してい ない	不明
計		100.0 (4,412)	61.1	18.3	5.6	3.8	12.9	9.5	5.1	4.2	1.7	35.5	3.4
男	60～64歳	100.0 (775)	39.5	8.4	2.2	0.1	1.7	14.0	0.6	11.0	1.5	57.4	3.1
	65～69	100.0 (555)	42.3	10.6	2.2	0.4	2.3	15.1	1.6	7.6	2.5	53.7	4.0
	70～74	100.0 (356)	44.7	13.5	3.7	—	1.4	15.4	0.8	6.5	3.4	50.8	4.5
	75～79	100.0 (211)	40.8	18.1	2.4	—	1.4	13.3	0.9	1.9	2.8	55.9	3.3
	80～	100.0 (110)	44.5	12.7	2.7	1.8	2.7	16.4	0.9	5.5	1.8	50.0	5.5
女	60～64歳	100.0 (850)	87.4	21.3	10.0	6.9	31.9	3.6	11.1	1.3	1.3	10.5	2.1
	65～69	100.0 (606)	83.0	24.8	9.9	5.9	24.7	6.8	8.1	1.3	1.5	14.5	2.5
	70～74	100.0 (450)	77.8	28.0	8.7	8.7	18.0	3.3	9.1	0.9	1.1	19.1	3.1
	75～79	100.0 (267)	60.7	33.0	4.1	2.6	7.9	6.7	4.9	1.1	0.4	34.1	5.2
	80～	100.0 (232)	44.4	17.3	1.7	8.6	4.3	8.2	3.9	—	0.4	49.6	6.0

的扶養によって生活保障機能が働くわけではないことを示すものである。このことは緊急時の援助者を健康状態別にみた表6でも裏付けられる。すなわち、「弱い」「床につききり」の場合の援助者が子・孫に比べ、近所、知人および家政婦、手伝いの比率が高いこと、しかも援助者なしの比率もかなりの高率になることが、このことを示しているといえるだろう。

以上、簡単に別居系列における家族関係をごく限られた範囲で述べたが、次に同居の場合をみることにしよう。

同居老人のうち、当該世帯の生計中心者である人が38.3%おり、これらの人の場合は依存性の増大傾向はま

だみられないといってよいだろう。残りの61.7%が、なんらかの形で依存性が高くなっているわけだが、老人本人の収入が比較的多く、かつ、有職の場合には同居の子に生活費を出したりするものが11.6%みられる。すなわち同居老人のうち半数近くは、経済的には自立性を保持しており、残りが、依存状態＝被扶養状態にあるということになる。

しかしながら、何等かの形で家族内での役割を持っているわけで、この点について、子への手助けの状況によってみると(表7)、35.5%は子への手助けをしていないと答えているが、残り約60%は何等かの仕事をしていると答えている。回答のカテゴリーが女性むきの仕事

が多いせいもあるが、男よりも女に「仕事をしている」と答えた人の比率がかなり高い。また、年齢が高くなるに従い「手助けをしている」人の比率は低くなっている。また「手助けをしている」人は「配偶者がある」=57.1%、「なし」=67.2%となっており、健康状態のいい人ほど「手助けをしている」と答えた比率が高くなっている。その手助けの内訳は、「留守番や店番」=18.3%、「食事のしたくやあとかたづけ」=12.9%、「庭やすまいの手入れ」=9.5%等が多く、以下「孫の世話」「洗濯、掃除、その他の家事」「冠婚葬祭等のつきあい」「縫物やつくろいもの」の順である。男に多いのは「庭やすまいの手入れ」「留守番や店番」「冠婚葬祭等のつきあい」等で、女の場合には「食事のしたくやあとかたづけ」「留守番や店番」「洗濯、掃除、その他の家事」「孫の世話」等となっている。以上みて事たように同居老人の場合、何等かの形で家族内の役割を持っているものの、年齢の上昇、健康状態の悪化等の要因は、家庭内での役割を減少させるのである。

次に食事を子としているかどうかにより、子との生活の共同の度合をみると、「大体一緒にする」が89.3%、「大体自分たちだけでする」が6.3%で残りは不明の4.4%である(表8)。しかし、年齢が上昇するにつれ「大体一緒にする」ものの比率が小さくなる傾向がみられる。

以上、子との同別居の状況を中心に家族内の人間関係をみてきたが、老人の生活にとって家族内における人間関係の重要さは、いうまでもないことであるが、またそれだけに、強い葛藤にさらされているのであり、家族による生活保障の機能の変容が急激に進行している状況における、老人にとって家族がどのような役割を果し得る

表8 性・年齢階級・配偶者の有無別にみた子との食事の状況(同居者) (%) 人

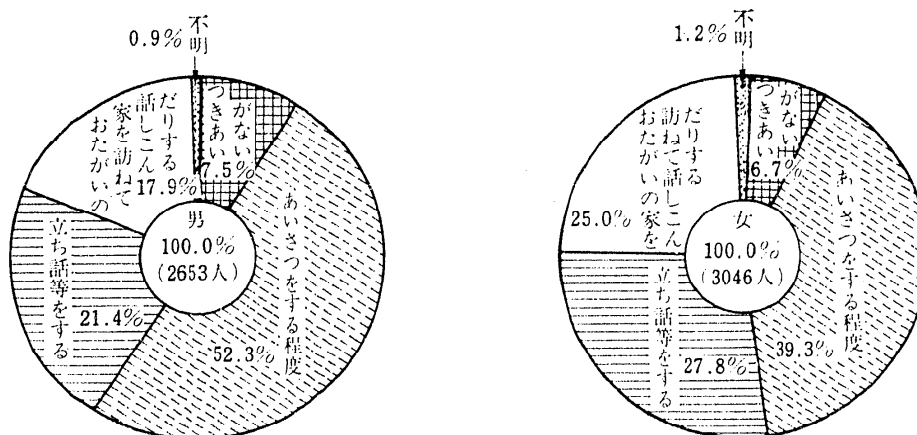
		計	大体一緒に 食事を している	大体自分 たちだけ で食事を している	不 明
計		100.0 (4,412)	89.3	6.3	4.4
性	男	100.0 (2,007)	89.5	7.1	3.4
	女	100.0 (2,405)	89.1	5.7	5.2
年 齢 階 級	60～64 歳	100.0 (1,625)	91.6	5.0	3.4
	65～69	100.0 (1,161)	89.3	6.4	4.3
	70～74	100.0 (806)	88.7	7.2	4.1
	75～79	100.0 (478)	86.6	7.1	6.3
	80～	100.0 (342)	82.8	9.6	7.6

のかという点の再吟味が緊要の課題となってきているといえよう。

次に近所づきあい、友人の有無等の社会関係の状況について簡単にふれておこう。近所づきあいについては、男女別では、「つきあいがいい」は男=7.5%、女=6.7%、「あいさつをする程度」は男=52.3%、女=39.3%と男のほうが比率が高くなっており、「立ち話をする」は男=21.4%、女=27.8%、「おたがいの家を訪ね、話してんだりする」は男=17.9%、女=25.0%と逆に女のほうの比率が高い。すなわち、男よりも女のほうが近所づきあいの程度が緊密である。また年齢階級別では高年齢

- 1) 老人をめぐる家族の研究については、すでに多くの秀れた研究があるが、那須宗一、増田光吉編『老人と家族の社会学』(1972、講座日本の老人3、垣内出版)はこの点に関する研究動向の展望を与えてくれる。

図3 性別にみた近所づきあいの程度



になればなる程「つきあいなし」が増大する。健康状態は「寝たきり」につきあいなしが多いのを除き傾向性は見出されない。また、就労状況では、近所づきあいの緊密さは「自営者」「無業者」「勤務者」の順となっており、また、職種別にはブルー・カラー的職業のほうがホワイト・カラー的な職業よりもつきあいは緊密となる傾向がみられる。

つきに友人状況では、全体ではほぼ6割が友人を持っており、男より女に、高年齢層よりは低年齢層に「友人あり」の比率が高い(表9)。また、健康状態が悪化すると「友人あり」の比率は急激に減少する。また、就労も友人の有無に影響を与えており、特に男の場合が顕著である。また有業者のうちでは自営者に「友人あり」が多くなっており、勤務者の場合は、雇用形態が安定し、地位の高い職種では「友人あり」の比率が高くなっている。

表9 性・年齢別にみた行ったり来たりする友人の有無 (%)

		計	友人が いる	友人が いない	不明
男	総計	100.0 (5,699)	59.1	38.6	2.3
	計	100.0 (2,653)	56.4	41.6	2.0
	60～64歳	100.0 (998)	61.9	36.5	1.6
	65～69	100.0 (745)	55.6	42.7	1.7
	70～74	100.0 (491)	56.1	41.5	2.4
	75～79	100.0 (278)	46.8	49.6	3.6
	80～	100.0 (141)	41.1	56.8	2.1
女	計	100.0 (3,046)	61.5	36.0	2.5
	60～64歳	100.0 (1,125)	66.6	30.1	3.3
	65～69	100.0 (794)	65.5	32.6	1.9
	70～74	100.0 (564)	58.8	38.5	2.7
	75～79	100.0 (310)	55.8	42.3	1.9
	80～	100.0 (253)	39.1	59.7	1.2

このように社会関係も、健康状態、就労等の生活構造の諸側面によって強く規定されているのである。

II 老人の余暇

老人の生活にとって余暇活動の持つ意味は決して小さい。職業活動からの引退は、余暇時間の相対的な増加を意味しているし、心身状態の衰え、家族内での役割

の変化(特に女の場合、家事労働の減少)等は「何もしないでよい時間」としての余暇時間の増大を意味している。

ちなみに、NHKの放送世論調査所が、昭和45年に実施した「国民生活時間調査」によって、余暇時間の長さ(平日)をみると、40代が平均5時間4分であるのに対し、60代で6時間9分、70代で7時間3分と、約1時間ないし2時間程壮年者に比べ老人の余暇時間は長くなっている。また、有業者の場合をみても、55歳から64歳の有業者では5時間1分と、有業者全体の余暇時間の4時間53分とほとんど長さは変わらないものの、65歳以上の有業者では5時間50分とほぼ1時間程長くなっている²⁾。

このような余暇時間の増加は、老人の生活構造を考察する上で重要な問題を提起する。ある思想家は増加する余暇の問題は死の問題と似たものであると指摘しているが³⁾、老人の場合にはまさに余暇の問題は死の問題と重なりあっているのである。すなわち、「何もしないでよいと同時に、何をしてもよい時間」というのは、要するに、孤独な人間が自ら内容を与え、自ら支えていなければならぬ時間、人間の側の緊張と努力が少しでも緩めば、確実に死に向って流れるほかのない時間である⁴⁾とするならば、先に述べたような老人の生活構造における依存性の増大傾向は、自ら内容を与え、自ら支えていくという緊張と努力の条件が失われていくことを意味する。だとすれば余暇時間はとりわけ老人の場合は、しばしば錯覚されているように決して「快適な」時間ではなく、むしろ死と直面した「重苦しい」時間であるかもしれない。このような「人生」の問題の前には、経験的な調査にはある限界があるのは認めざるを得ないが、それにしても、老人の余暇行動に焦点をあてた調査研究はまだ不十分であるという他はない。本調査においてもこの不十分さは例外ではないが、マス・コミュニケーションへの接触状況、趣味の状況が、老人の生活構造の基本属性とどのように関連しているかを明らかにすることによって、この問題への経験的なアプローチのステップとすることを狙いとして分析を行なってみよう。

はじめにマス・コミュニケーションとの接触状況をみていくことにしよう。ここではテレビと新聞を取りあげて、この二つのメディアが老人の属性によって接触のパ

2) NHK 放送世論調査所編『日本人の生活時間 1970』(1971年、日本放送出版協会)第5章参照。

3) 清水幾太郎著『現代思想』(1966年、岩波書店)pp.392～393。

4) 清水幾太郎著、前掲書、p. 396。

ターンがどのような差異がみられるかを検討したい。

先に引用した NHK の国民生活時間調査によれば⁵⁾、老人の余暇時間に占めるテレビ視聴時間の割合が非常に高いことが報告されている。すなわち、40代の人たちのテレビ視聴時間は4時間未満が大半であるのに対し、60歳以上の老人の半分近くが4時間以上、しかもその3分の1あまりが6時間以上もテレビを見つけていることになる。

本調査においても、テレビを「毎日長い時間みる」と答えた人は20.6%、「毎日みるが長い時間ではない」人が68.2%で、テレビをほとんどみなかったり、テレビがないと答えた人は僅か10.7%であった。一方、ラジオについては、「ほとんど聴かない」および「ラジオがない」と答えた人を合わせると75.3%で、ラジオを毎

日聴くと答えた人は僅かであった。また、新聞については、「毎日読む人」は64.0%、「ときどき読む人」は17.6%、「まったく読まない」および「新聞をとっていない」人は合わせ17.8%であった。

このように、老人の余暇生活に占めるマス・コミとりわけテレビの比重は非常に高いのであるが、以下、電波メディアであるテレビと活字メディアである新聞との接触状況のパターンを老人の属性ごとに検討してみよう。

まず性別および年齢階級別にみたのが図4である。テレビ視聴では「毎日長い時間みる」と答えた人は女の方が多く、また、年齢が高くなっても長時間視聴者の比率はあまり変化せず、むしろ高くなっている。一方、「ほとんどみない」と答えた人は年齢が高くなればなる程比率が高くなっているの、高年齢層ではテレビをよく見る人と見ない人に両極に分解する傾向があるといえよう。これに対して新聞の購読状況を見ると、男女別では男の

5) NHK放送世論調査所編、前掲書、pp. 220～231.

図4 性別にみたテレビ、新聞の視聴と購読状況

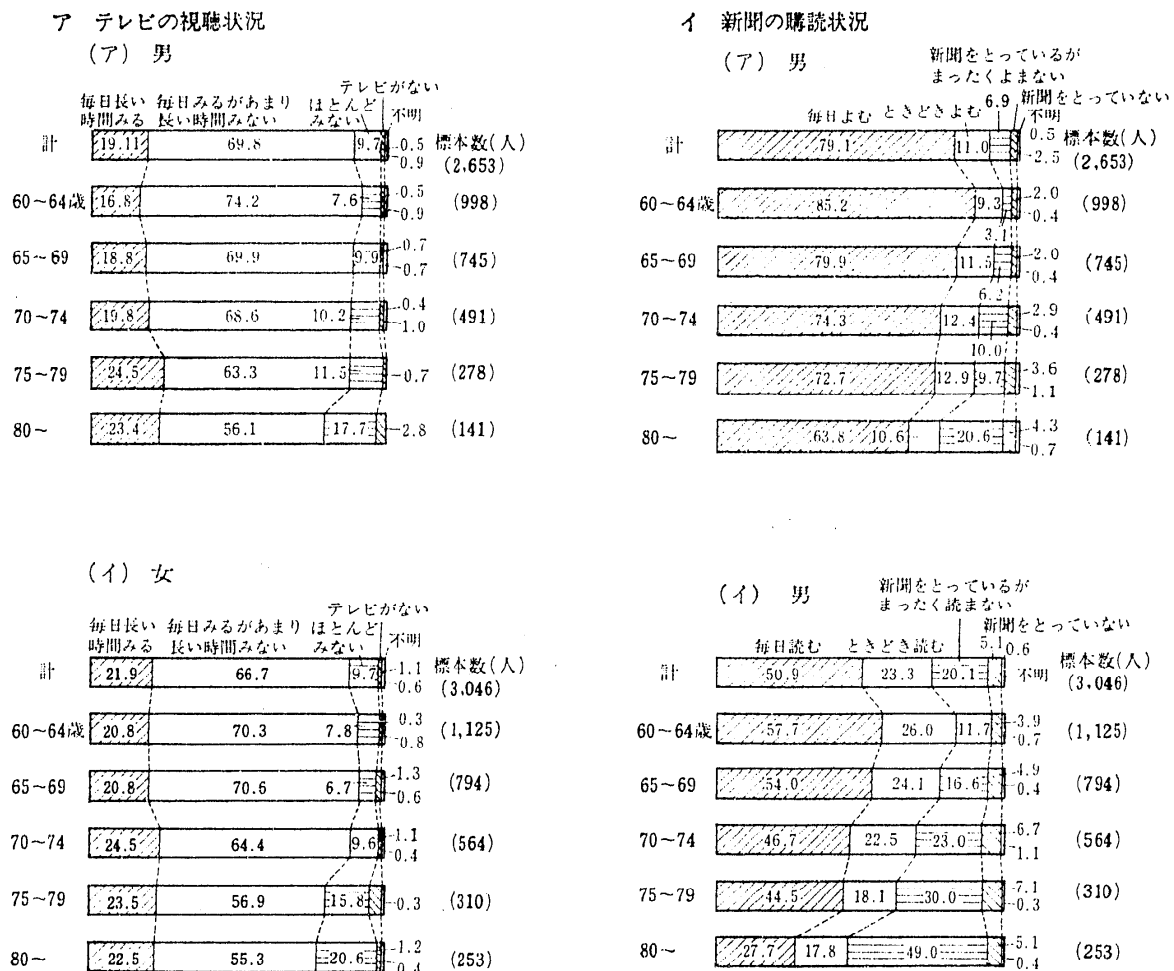
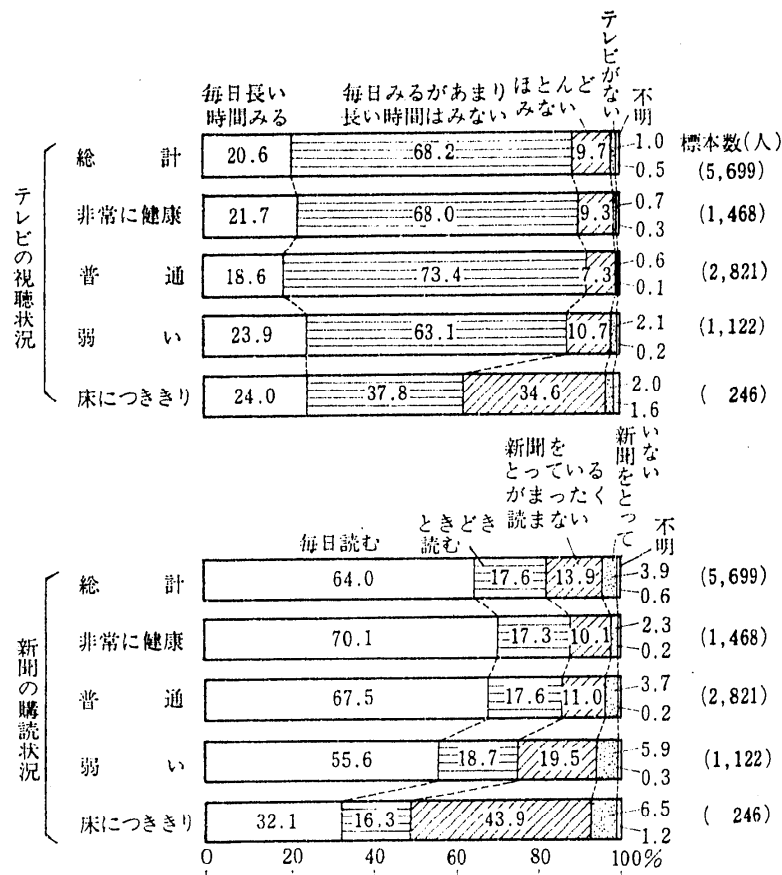


図5 健康状態別にみたテレビの視聴状況および新聞の購読状況



方が圧倒的に購読の割合が高く、しかも、年齢の低い層の方が購読の割合が高い。男では「毎日読む」人が全体の71.9%、しかも、60歳代で80%前後、70歳以上でも70%台であるのに対し、女では「毎日読む」人が全体の50.9%で、60歳代では50%台、70歳以上では40%台である。

この事実、老人の生活におけるテレビと新聞のマス・メディアとしての位置および機能の違いを暗示しているのであるが、このことは健康状態、就労、経済階層等の老人の属性別に分析を続ければ一層明らかになる。

健康状態との関連は図5に示されている。テレビ視聴では「毎日長い時間みる」という人は、「非常に健康」あるいは「普通」の人よりも「弱い」あるいは「床につききり」の人のほうに多い。また「ほとんどみない」人も「弱い」あるいは「床につききり」の人に多い。このことは視聴が可能な限りにおいてテレビが気ばらしのためのメディアとして健康のすぐれない人にも好まれていることを示している。ところが、新聞の購読状況では、新聞を「毎日読む」という人は健康状態の良好な人に圧倒的に多く、70%前後が「毎日読む」と答え、健康のすぐれない人では「弱い」人が55%強、「床につききり」の人で32%と新聞を読む人は少なくなり、新聞を読まない人の方が多数を占めるようになる。

このことは老人の日常生活の一側面たる健康状態と、マス・コミ接触の型が強い関連を持っていることを示すものである。

次に、社会的活動としての職業生活との関連でマス・コミ接触の型をみてみよう。仕事が自営か、勤務かあるいは無業かという三分類別にみると、テレビの視聴状況では「毎日長い時間みる」人は無業者=23.9%、自営者=17.2%、勤務者15.2%の順になり、新聞の購読状況は「毎日読む」人は、勤務者=78.3%、自営者=74.1%、無業者=55.6%である。この数字は新聞は職業生活を営んでいる人に多く購読され、テレビは無業者により多く視聴されていることを明らかにする。さらに有業者の職種別にみると、新聞は「専門技術」「管理」「事務」等のホワイト・カラー層に「毎日読む」人の比率が高く、ブルー・カラー層ではこの比率は低くなっている。とこ

ろがテレビではこのような職種ごとによる傾向性は見出されなかった。

次に、老人が属している世帯の経済階層別にみると、新聞の場合は高階層であればある程「毎日読む」人の比率が高く、逆に新聞を読まなかったり、とっていない人の比率は減少する。ところがテレビでは階層差はあまり見出されなかった。

このようにみえてくると、テレビと新聞という2つのマス・メディアが持つ老人の生活のなかでの意味がかなり異なっていることが明らかにされたといえよう。テレビの場合は娯楽性ということが、老人の生活に深く浸透している原因であろうし、特に余暇時間の長い老人層に対して、手っとり早い時間つぶしあるいは気ばらしの手段を提供しているといえる。このことが健康のすぐれない老人、あるいは無業の老人に相対的に接触の度合いが高い理由であろう。一方、新聞は明らかに、老人の社会的活動への参加の状況に関わっているということがいえる。健康状態がよければよい程、有業者であればある程、経済階層が高ければ高い程、新聞との接触が相対的に多いということは、どの程度社会活動に関っているか、あるいは老人の生活の自立性がどの程度高いかによって、マ

ス・コミへの接触のパターンが規定されているかを示すものであろう。

しかしながら、以上の分析は表面的なものにとどまっている。したがって、メディアの内容、あるいは受け手の反応等を加味した、老人のマス・コミ接触行動に関する調査、研究が必要なのではないだろうか。というのは先にも触れたように、老人の生活に占めるマス・メディアの比重が非常に高く、マス・コミ接触が重要な生活場面になっているからである。

次に趣味の状況についてみると、「趣味あり」答えた人は総数の76.4%、「趣味なし」は23.1%であった。その内訳では第1位が「草花の手入れや庭いじり」、第2位が「旅行」、第3位が「芝居や映画、寄席などの見物」以下「犬、猫、小鳥等の動物の世話」「謡、茶道、踊等のけいこ事」「将棋、将棋等」そして「ゴルフ、つり、テニス等の運動」の順になっている。

性別でみると、表10の通り、男のほうが「趣味あり」が7%ほど多く、女に比べ男の比率が高い趣味は、「ゴルフ、つり、テニス等の運動」「囲碁、将棋等」で女に比率が高いものは「謡や茶道、踊り等のけいこ事」「芝居、映画、寄席等の見物」などである。男女に共通して

表10 性・年齢階級別にみた興味の状況

(% 人)

		計	趣味あり	草花の手 入れや庭 いじり	犬・猫・ 小鳥等動 物の世話	囲碁・ 将棋等	ゴルフ・ つり・テ ニス等の 運動	謡・茶 道・踊 り等	芝居や映 画・寄席 等	旅 行	その他	趣味なし	不 明
総 計		100.0 (5,699)	76.4	28.2	5.3	4.2	3.7	5.1	6.3	15.2	8.4	23.1	0.5
男	計	100.0 (2,653)	80.2	27.1	4.8	8.5	7.7	3.0	4.4	16.0	8.7	19.3	0.5
	60～64歳	100.0 (998)	84.6	23.8	5.5	10.1	11.6	3.0	4.2	17.0	9.4	14.9	0.5
	65～69	100.0 (745)	80.5	27.4	3.9	7.7	6.2	3.6	5.6	16.8	9.3	19.1	0.4
	70～74	100.0 (491)	76.8	28.6	6.3	7.9	5.3	1.4	3.7	16.1	7.5	22.6	0.6
	75～79	100.0 (278)	73.0	31.9	2.9	6.1	4.0	4.0	3.6	12.6	7.9	27.0	—
	80～	100.0 (141)	73.8	34.2	3.5	8.5	4.3	3.5	2.8	11.3	5.7	25.5	0.7
女	計	100.0 (3,046)	73.1	29.3	5.7	0.4	0.1	7.0	8.0	14.5	8.1	26.3	0.6
	60～64	100.0 (1,125)	78.2	30.6	6.0	0.6	0.3	8.2	8.0	17.7	6.8	21.1	0.7
	65～69	100.0 (794)	75.3	27.6	6.4	0.4	—	7.4	8.3	16.9	8.3	24.3	0.4
	70～74	100.0 (564)	71.4	29.3	5.9	—	0.2	6.2	9.4	12.8	7.6	27.7	0.9
	75～79	100.0 (310)	63.2	29.0	4.2	—	—	5.8	7.4	7.4	9.4	36.5	0.3
	80～	100.0 (253)	58.9	28.5	3.6	0.8	—	3.2	4.3	5.9	12.6	40.7	0.4

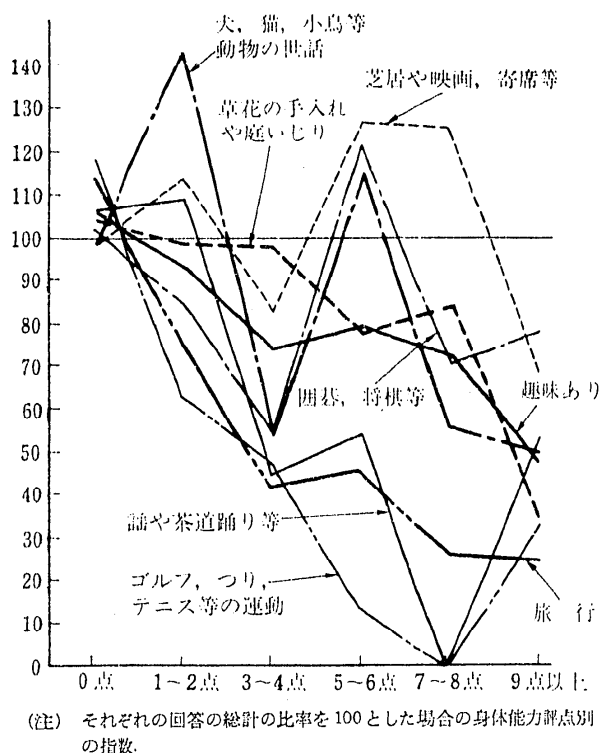
多くみられるが、男にやや多いものは「旅行」で、女にやや多いのは「草花の手入れや庭いじり」「犬、猫、小鳥等の動物の世話」等である。

年齢別にみると、高年齢になればなる程「趣味あり」と答えた人が減少する。そしてこの傾向は多くの趣味内容に共通するが、ただ「草花の手入れ、庭いじり」はむしろ高年齢の人に相対的に多い。

この趣味の状況を健康状態別にみると、「非常に健康」「普通」の人は「趣味あり」が約 80% であるが、「弱い」人は 66.9%、「床につききり」の人は 44.3% と、健康状態の悪化に従って「趣味あり」の比率は小さくなる。身体能力の評点別にみても点数の低い人に「趣味あり」が多く、評点が高くなればなる程（すなわち身体能力が低下していればいる程）「趣味あり」が減少する。図 6 は身体能力の低下が、趣味の種類にどのように影響を与えているかを示したものであるが、「ゴルフ、つり、テニス等の運動」「旅行」および「謡や茶道、踊りなどのけいこ事」等を趣味としてあげた人は評点が 0 点から 1～2 点のところで急激に減少し、それ以上のところではさらに少なくなっている。ところが「草花の手入れや庭いじり」「動物の世話」等を趣味とする人は減少の程度は緩やかで、評点の高い人にもかなり多くみられる。また「囲碁、将棋」「芝居、映画、寄席等の見物」等はむしろ評点の高い人に多くなっている。このように身体能力の低下に応じて、趣味内容がはっきりと異なっており、身体能力低下の影響を強く受ける趣味のグループとそうでないものに分かれるのである。

就労状況によって趣味の状況を見ると（表 11）勤務者および自営者の場合、いずれも「趣味あり」が 80% 台で、無業者の 72.7% よりも 10% 近く比率が高くなっている。この傾向は年齢別にみても、男女別にみても変わっていない。この理由は仕事による収入が趣味を楽しむ

図 6 身体能力評点別にみた趣味の状況



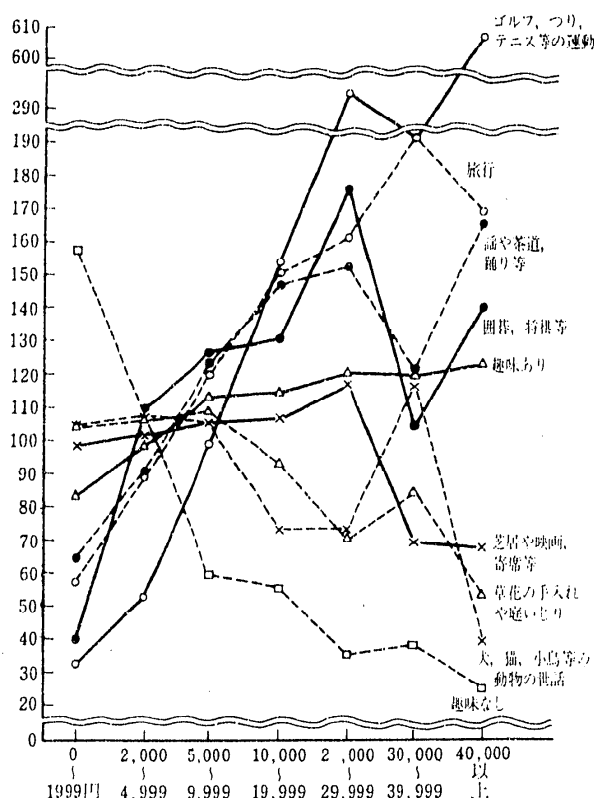
む出費を可能にすること、仕事につくことによって得る心のはりが、趣味を楽しむエネルギーを与えること等によるためだろう。前者については毎月のこづかい額によって趣味の状況をみた図 7 によって裏付けることができる。「趣味あり」はこづかい額が多ければ多い程増加し、「趣味なし」はその逆で、5,000 円以上と以下で趣味なしの人の比率に差がでてくる。趣味の内訳では、こづかい額の増加に最も強く規定されているのは「ゴルフ、テニス、つり等の運動」で、「旅行」「謡、茶道、踊り等のけいこ事」、「囲碁、将棋」等の趣味もこづかい額が多ければ多い程、増加する傾向がある。一方「芝居や映画、寄

表 11 就労状態別にみた趣味の状況

(% 人)

	計	趣味あり	草花の手 入れや庭 いじり	犬・猫・ 小鳥等動 物の世話	囲碁 将棋等	ゴルフ・ つり・テ ニス等	謡や茶 道・踊り 等	芝居や映 画・寄席 等	旅 行	その他	趣味なし	不 明
総 計	100.0 (5,699)	76.4	28.2	5.3	4.2	3.7	5.1	6.3	15.2	8.4	23.1	0.5
勤 め て い る	100.0 (1,202)	82.2	27.5	5.4	8.1	8.9	3.3	6.2	14.3	8.5	17.8	—
自営等をしている	100.0 (1,153)	81.2	22.6	4.6	6.1	5.5	5.4	4.9	22.6	9.5	18.6	0.2
仕事をしていない	100.0 (3,278)	72.7	30.5	5.5	2.1	1.1	5.7	6.8	13.0	8.0	26.6	0.7
不 明	100.0 (66)	69.7	28.8	6.1	3.0	1.5	3.0	9.1	15.2	3.0	21.2	9.1

図7 こづかい額別にみた趣味の状況



(注) それぞれの回答の総計の比率を100とした場合のこづかい額の指数。

席等の見物」「犬、猫、小鳥等動物の世話」「草花の手入れや庭いじり」等の趣味は小づかい額の増加の影響は受けないか、あるいはむしろ小づかい額の少ない人に多い傾向が見出される。こづかい額の多寡は本人の収入額に直接規定されているのであるが、本人収入額による四分位階層によって趣味の状況をみると、こづかい額によってみた場合とまったく同じ傾向が見出された。

本人の職業と趣味の状況との関連をみると、「趣味あり」は専門的・技術的職業および管理的職業従事者および事務従事者等のホワイト・カラー層のほうが、単純労働、サービス、技能工、生産工程作業者等のブルー・カラー層よりも比率が高く、しかも趣味の内容に差がみられ、ホワイト・カラー層では「ゴルフ、つり、テニス等の運動」「旅行」「謡、茶道、踊り等のけいこ事」の比率が相対的に高く、ブルー・カラー層では「草花の手入れや庭いじり」および「犬、猫、小鳥等動物の世話」等の比率が高くなっている。

以上の事実は、趣味の有無およびその内容が、経済的、社会的地位に強く規定されていることが示されている。

次に、社会関係の状況と趣味の関連をみておこう。近

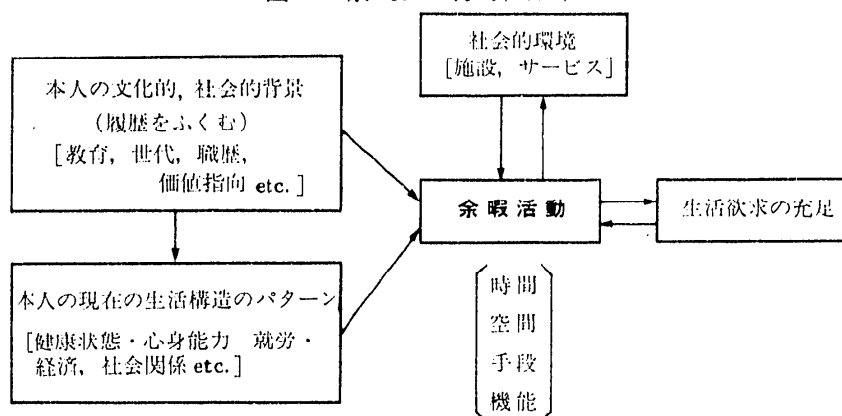
所づきあいについては「つきあいがいい」「あいさつ程度」「立話などをする」の4段階に対し、「趣味あり」がそれぞれ55.3%、74.8%、81.7%と近所づきあいが緊密になればなる程増加している。趣味の内訳についても、いくつかの例外(「囲碁、将棋」および「運動」)を除き、近所づきあいが緊密な程比率が増加している。また友人の状況についても、「趣味あり」の人は「友人がいる」人で84.7%と、「友人がいない」と答えた人の64.6%に比べ約20%多くなっている。趣味の内訳についてもほとんどの種類の趣味について「友人あり」の人の比率が高く、この傾向が顕著なのは、「ゴルフ、つり、テニス等の運動」「謡や茶道、踊り等のけいこ事」「旅行」「芝居、映画、寄席等の見物」等の趣味である。また「草花の手入れや庭いじり」や「犬、猫、小鳥等の動物の世話」は友人の有無による差はそれほどみられず、「囲碁や将棋」は逆に「友人なし」のほうが多くなっている。

団体への参加度についても、参加団体数が多ければ多い程、「趣味あり」の比率は増加しており、趣味の内訳についても「草花の手入れや庭いじり」「犬、猫、小鳥等の動物の世話」「芝居や映画、寄席等の見物」を除いて、団体への参加度が高い程、比率は高くなっている。また、老人クラブへの参加との関連では、クラブへ参加している人の方がやや「趣味あり」の人の比率が上回っており、特に「旅行」「謡や茶道、踊り等のけいこ事」を趣味とする人にこの傾向が顕著である。

以上の分析で試みてきたことは、余暇行動の内容が、健康や身体能力の状況、就労や経済の状況、社会関係等の老人本人の現在の生活構造のパターンを規定する要因によって、どのように規定されているかを示すことであった。高齢化によって生じた余暇時間の増大は、まずテレビ視聴によって満たされることを、生活時間調査のデータにより示した。次に、テレビと新聞という2つのマス・メディアへの接触の頻度が、老人の属性によって異なっていることが明らかにされた。さらに、マス・コミ接触とならぶ余暇形態である趣味のパターンがこれまた老人本人の生活構造を規定する要因によって規定されていることが明らかになった。たとえば、身体能力に衰えがなく、職業を持っており、それも高い地位の職場の場合、しかも経済的に恵まれており、あるいは社会関係が緊密な場合、における趣味有無およびその内容はそうではない場合とは、明らかに違いがみられるのである。

以上の事実は老人の余暇活動には一定の階層性が存在

図 8 余暇の分析枠組



することを示すものに他ならないのである。

いうまでもなく、これまでの分析は老人の余暇活動の全体的な解明にとっては不十分なものである。たとえば、余暇活動の内訳を十分とらえているとはいえないし、それが生活欲求との充足とどのような関連があるかを明らかにしてはいない。老人の余暇活動の解明にはさまざまなアプローチが考えられるが、図8の枠組はそのひとつの例示である。

本稿で行なったのは、本人の現在の生活構造のパターンが余暇活動をどう規定しているかという点に一部分照明をあてたにすぎない。しかも、余暇活動の内容を恣意的に限定しているため、まず、今後の前進のためには余暇活動の内容の整理をする必要があるであろう。この点に関してはすでにデュマズディエが余暇を休息、気晴し、自己開発の3つのカテゴリーの3機能に分類しているが⁶⁾、老人の余暇行動に焦点をあてて、余暇活動の内容を検討した例はほとんどないといってよい。さらに、余暇の時間的、空間的な活動の測定および余暇手段の測定により、余暇活動の総合的測定を試みる必要がある。さらにこれが、生活欲求とどう対応しているのか、また余暇の活動が時間的に学習を必要とするものであるとするなら、本人の文化的、社会的背景とどう関連しているのか、そして、余暇活動は社会的なひろがりを持つものであるとするならば、社会的な施設、サービスをはじめとする社会的・環境的要因とどう対応しているか等を検討する必要がある。余暇はしばしば「労働」との対立概念として、特に青年と壮年を中心として論じられているが、この節の冒頭に述べた理由により、人生における時間配分という視点において、老人の余暇問題に正面から

取り組む必要があるし、この取り組みの過程で、従来「生きがい対策」という呼び方であいまいにされてきた余暇をめぐる老人への社会サービスの問題が問直されるように思う。

III 老人の生活意識

——孤独感と老人意識を中心として——

今回の調査では、老人の生活実態の把握に主眼をおかれたため、老人の意識面についての質問は最小限に限らざるを得なかった。ここではそのなかからさらに孤独感と、自分を老人と意識しているかどうかについての老人意識についてその結果を紹介することにしたい。

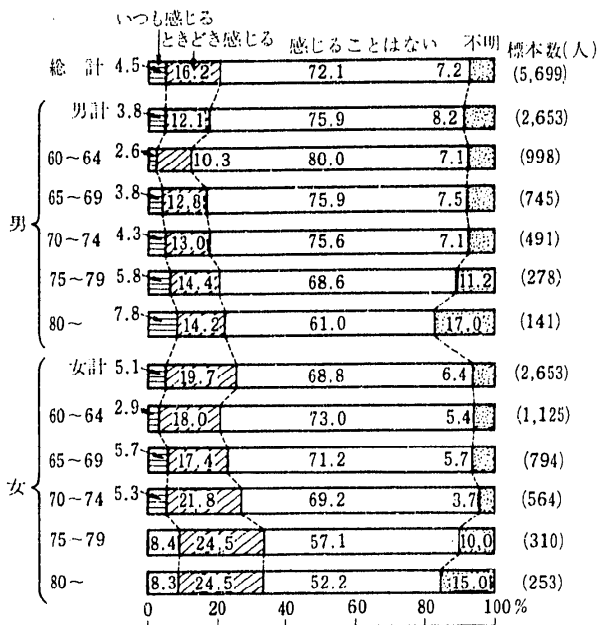
ひとくちに孤独感といっても、文字通り一人ぼっちで孤立していることからくる孤独感から、家庭生活、社会生活を営んでいるにもかかわらず、その中で文化的あるいは心理的に適応していくことができないために、おきざりにされているとか、疎んぜられたように感ずることから生じる孤独感とかさまざまな意味あいのある感情である⁷⁾。ここでは文字通り「ひとりぼっちでさびしいと感じることがありますか」と問い、「いつも感じる」「ときどき感じる」「感じることはない」の3段階の尺度への回答によって孤独感の指標とした。

総数では、ひとりぼっちでさびしいと「いつも感じる」人が4.5%、「ときどき感じる」人は16.2%、「感じることはない」人は72.1%で残りの7.2%は不明であった。これを性・年齢階級別にみると(図9)、女は男よりも孤独感の度合いが強く、「いつも」と「ときどき」をあわせ、男=15.9%に比べ、女=24.8%となっ

6) Joffre Dumazedier "Versune Civilisation du Loiser?" 邦訳 中島巖訳『余暇文明へ向かって』(1972, 創元社), 訳書 pp. 17~19.

7) Townsend と Tunstall は, Isolation, Desolation, Loneliness の3つの概念を孤独感と関係づけて分析している。Shamas, Townsend 他著 "Old People in Three Industrial Societies" (1968, Routledge) Chap. 9, 参照。

図 9 性・年齢別にみた孤独感



ている。また男女ともに高年齢になればなる程、孤独感が増すという結果がでている。しかも男と女の差は年齢階級を通じて、女のほうに孤独を感じるものの比率が高い。それではこの孤独感が、健康、就労、経済、家族、社会関係等の状況にどのように規定されているのかを次に検討しつつ、その結果から孤独感の意味あいをさぐることにしたい。

はじめに健康状態との関連であるが(図 10)、孤独を「いつも感じる」と「ときどき感じる」と答えた人を合計して、健康状態別に比較すると、「非常に健康」な人は 15.9%、「普通」の人は 20.4% が孤独を感じているのに比べ、「弱い」人は 32.4%、「床につききり」の人は 49.6% と孤独を感じる人が健康状態の悪化に伴って急増している。この傾向は身体能力の悪化にも同じようにみられる。このような健康状態が十分でないほど孤独感が増すという傾向は、健康が秀れないことからくる心細さ、不安感が直接孤独感に投影しているとともに、家

図 10 健康状態別にみた孤独感の状況

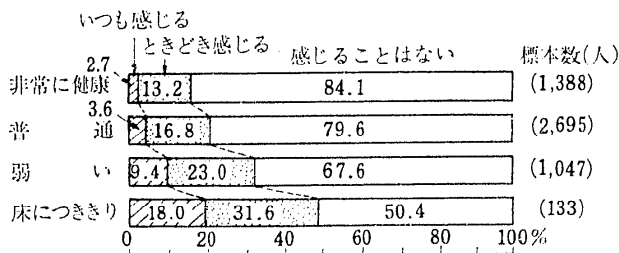


表 12 家族類型別にみた孤独感の状況 (% 人)

	計	いつも感じる	ときどき感じる	感じることはない
1 人 暮 し	100.0 (352)	14.8	29.0	56.2
老 人 夫 婦 の み	100.0 (868)	4.6	17.2	78.2
老人と配偶者がいない子	100.0 (1,399)	3.1	14.5	82.4
老人と配偶者がある子	100.0 (307)	3.3	19.2	77.5
老 人 と 子 と 孫	100.0 (2,104)	4.3	17.5	78.2
老人と子と孫とひ孫	100.0 (51)	3.9	11.8	84.3
そ の 他	100.0 (205)	9.3	17.1	73.6

(注) 「孤独感」の不明を除いて百分率を算出。

族や経済状況、社会関係に健康の悪化のため、うまく適応できないことから孤独感が強くなるという間接的な影響もあいまっているのであろう。

家族の状況が孤独感に与える影響も健康状態と並んで大きいといえる。家族類型別にみると(表 12)、当然のことながら 1 人ぐらしの人に孤独を感じている人が多く、43.8% の人が「いつも」あるいは「ときどき」孤独を感じていると答えている。他の家族類型の人は孤独を感じていない人がいずれも 70% を越えているが、そのなかで興味深いのは、無配偶の子と暮している人で孤独を感じている人が 17.6% であるのに対し、子が有配偶となった場合 22.5% と約 5% 比率が高くなっており、子が配偶者を得ることによっておこる親の孤独感の増大を物語っているのではなかろうか。

配偶者の有無も孤独感に影響を与える。とくに男の場合、配偶者がいない場合より強く孤独を感じるようである。配偶者がある人で孤独を「いつも」および「ときどき」感じている人は男=13.3%、女=18.6% で女のほうが孤独感は強いが、配偶者なしの場合は孤独を感じる人が男=42.6%、女=32.8% で、男のほうが 10% 程孤独を感じる人が多く、しかも「いつも感じる」という人が男=12.0%、女=7.8% と男に多くなっている(表 13)。さらに年齢階級別にみた場合、配偶者のある人となない人との間の孤独を感じている人の比率の差をみると、男の場合は年齢階級が低ければ低いほど配偶者なしの場合に孤独を感じずる人が多くなっており、配偶者に先立たれることによって生ずる孤独感は男に、とりわけより低い年齢階級の男に強くあらわれるのである。

つぎに子供との関係で孤独感をみると、子供の無い人は 40% 近くが孤独感を持っているのに対し、子供があ

表 13 性別にみた配偶者の有無と孤独感の状況

(% 人)

		男				女			
		計	いつも感じる	ときどき感じる	感じることはない	計	いつも感じる	ときどき感じる	感じることはない
計	配偶者あり	100.0 (2,093)	2.9	10.4	86.7	100.0 (1,265)	2.5	16.1	81.4
	配偶者なし	100.0 (343)	12.0	30.6	57.4	100.0 (1,585)	7.8	25.0	67.2
60 ～ 64 歳	配偶者あり	100.0 (863)	2.4	8.8	88.8	100.0 (667)	2.2	16.2	81.6
	配偶者なし	100.0 (64)	7.8	42.2	50.0	100.0 (397)	4.5	23.7	71.8
65 ～ 69	配偶者あり	100.0 (610)	3.0	11.5	85.5	100.0 (350)	1.7	13.1	85.2
	配偶者なし	100.0 (79)	12.7	31.6	55.7	100.0 (399)	9.8	23.1	67.1
70 ～ 79	配偶者あり	100.0 (552)	3.3	11.4	85.3	100.0 (234)	3.8	19.7	76.5
	配偶者なし	100.0 (151)	12.6	27.2	60.2	100.0 (588)	8.0	26.0	66.0
80 ～	配偶者あり	100.0 (68)	5.9	11.8	82.3	100.0 (14)	7.1	28.6	64.3
	配偶者なし	100.0 (49)	14.3	24.5	61.2	100.0 (201)	10.0	28.9	61.1

(注) 「孤独感」の不明を除いて百分率を算出。

表 14 子との同別居，別居理由，子との接触頻度別にみた孤独感

(% 人)

		計	いつも感じる	ときどき感じる	感じることはない	不明
同	居	100.0 (4,412)	3.7	15.2	73.3	7.8
別	居*	100.0 (1,287)	7.1	19.5	68.2	5.2
別居理由	子が近くにいない	100.0 (214)	5.6	15.9	72.4	6.1
	家が狭い	100.0 (137)	4.4	20.4	71.6	3.6
	子が賛成しない	100.0 (92)	12.0	27.2	55.4	5.4
	別に暮す方が気楽である	100.0 (469)	3.2	16.4	77.4	3.0
	別居理由不明	100.0 (53)	3.8	13.2	49.0	34.0
子との接触頻度	ほとんど毎日	100.0 (273)	1.8	17.2	76.2	4.8
	週1回以上	100.0 (224)	3.6	16.1	75.4	4.9
	月1～2回	100.0 (313)	7.0	17.3	72.5	3.2
	ほとんどない	100.0 (131)	8.4	26.0	59.5	6.1
子がいない		100.0 (322)	14.3	24.8	57.2	3.7
不明		100.0 (24)	—	—	45.8	54.2

* 別居には子なしをふくめむ比率。

る人は孤独感を持つ人が少なくなる。しかも子供の数が多ければ多いほど孤独感を持つ人は少なくなる。また男よりも女のほうが子供の有無による孤独感の有無の差が大きい。

さらに子との関係を同居関係および別居理由別にみると(表 14)，同居の場合に孤独感を持っている人は 18.9% であるのに対し，別居の場合は 26.6% である。ところが別居理由別にみると，子供が近くにいなかったり，家が狭いというやむをえないと思われる理由で別居している場合は，同居の場合に比べ，孤独を感じている人の比率はやや多い程度であるが，子供が同居に賛成しないというような理由の場合は，孤独を「いつも感じる」および「ときどき感ずる」がそれぞれ 12.0%，27.2% と他の別居理由における孤独感よりも顕著に比率が高くなり，ほぼ子がいない場合と同じくらいの高い比率を占める。このことは，ただ物理的に子と別居しているための孤独感より以上に，子との心理的な関係が孤独感に強い影響を与えていることを示している。別居者のまた子との接触頻度では，ほとんど毎日とか週 1 回以上頻繁に子との接触がある場合は，同居の人の孤独感と変わらないが，月 1～2 回あるいはほとんどない場合は孤独感を感じる人の比率がかなり高くなっている。

以上みてきたように家族関係は孤独感を非常に強く規定していることがわかる。配偶者との離死別，子との別

表 15 就労状態別にみた孤独感 (% 人)

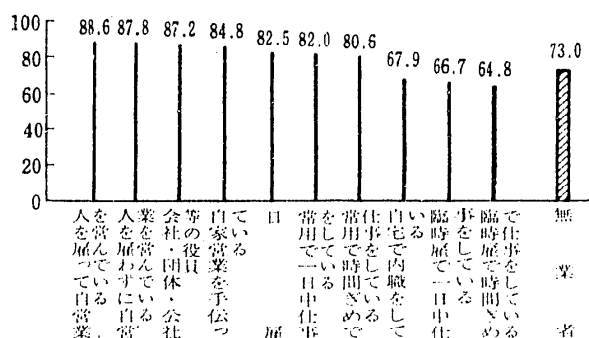
	計	いつも感じる	ときどき感じる	感じることはない	不明
総 計	100.0 (5,699)	4.5	16.2	72.1	7.2
勤めている	100.0 (1,203)	3.2	13.9	77.3	5.6
自営業等をしている	100.0 (1,153)	3.0	10.6	82.4	4.0
仕事をしていない	100.0 (3,277)	5.6	19.3	67.1	8.0

(注) 「就労状態」の不明は除く。

居等はとりわけ強い孤独感を老人に与えるのである。

就労状態も孤独感に影響を与える。表 15 は勤務者、自営者、無業者別に孤独感をみたものであるが、有業者よりも無業者のほうが孤独を感じる人が多く、自営者よりは勤務者のほうが孤独を感じる人が多いことを表している。さらに有業者の雇用形態別に、孤独感を持たない人の比率の高いものから順番にならべてみると(図 11)、「自営業主」、および「会社団体の役員等の経営管理層」は孤独を感じる人が少なく、「内職」「臨時雇」等は孤独を感じる人が無業者よりも多くなっている。このことは仕事の内容および安定性が孤独感を規定していることを示すものである。

図 11 従業上の地位・自営業態別にみた孤独を「感じることはない」と答えた人の百分率



また近所づきあいや友人の有無等の社会関係では、近所づきあいが緊密であるよりもない人、友人がある人よりもない人に孤独感を持つ人の比率が高く、就労状況による結果とあいまって、老人がどの程度社会的な関係を維持しているか否かによっても孤独感を感じる度合が異っていることを示している(表 16)。

最後に経済階層との関係をみておこう。生活保護および課税状態による階層分類によっても(表 17)世帯収入四分位階層によっても下位の階層に属している老人程、孤独を感じる人の比率が高く、年齢階級別にみてもこの

表 16 社会関係と孤独感 (% 人)

	計	いつも感じる	ときどき感じる	感じることはない
計	100.0 (5,286)	4.9	17.5	77.6
近所づきあい				
つきあいがいい	100.0 (335)	9.9	25.4	64.7
あいさつする程度	100.0 (2,399)	5.1	17.5	77.4
立ち話し等をする	100.0 (1,348)	3.9	16.4	79.7
おたがいの家を訪ねて話しこんだりする	100.0 (1,165)	4.1	16.2	79.7
友人の有無				
友人がいる	100.0 (3,169)	3.8	16.1	80.1
友人がいない	100.0 (2,014)	6.5	19.8	73.7

(注) 1. 「孤独感」の不明を除いて百分率を算出。
2. 「近所づきあい」「友人の有無」の不明は除く。

表 17 年齢階級・課税状況別にみた孤独感

	計	いつも感じる	ときどき感じる	感じることはない
計	100.0 (5,286)	4.9	17.5	77.6
生活保護受給				
計	100.0 (76)	17.1	35.5	47.4
60 ~ 64 歳	100.0 (23)	8.7	43.5	47.8
65 ~ 69	100.0 (16)	25.0	31.3	43.7
70 ~ 79	100.0 (33)	15.2	33.3	51.5
80 ~	100.0 (4)	50.0	25.0	25.0
所得税非課税				
計	100.0 (972)	7.9	20.6	71.5
60 ~ 64	100.0 (308)	5.2	19.8	75.0
65 ~ 69	100.0 (259)	11.2	19.7	69.1
70 ~ 79	100.0 (346)	7.2	21.7	71.1
80 ~	100.0 (59)	11.9	22.0	66.1
所得税課税				
計	100.0 (4,095)	3.8	16.3	79.9
60 ~ 64	100.0 (1,627)	2.5	14.0	83.5
65 ~ 69	100.0 (1,112)	3.3	14.9	81.8
70 ~ 79	100.0 (1,098)	5.4	18.8	75.8
80 ~	100.0 (258)	8.1	26.0	65.9

(注) 1. 「孤独感」の不明を除いて百分率を算出。
2. 「課税状況」の不明は除く。

傾向は変わらない。また収入の種類別では、「仕事による収入」あるいは「財産収入」によっている人は孤独を感じる人の比率は「仕送り」や「年金、恩給等の社会的保障」による収入によっている人よりも低くなっている。このように経済状況がもたらす要因も孤独感という心理的要因に色濃く投影しているのである。

以上、孤独感が健康、家族関係、就労および社会関係、そして経済階層と、生活構造のそれぞれの側面に強く規定されていることがわかった。そしてこの規定のしかたは、実は前号で述べた、老人の生活構造における自立性と依存性と関係しているのである。すなわち、健康の悪化、家族内地位、役割の低下あるいは喪失、職業生活あるいは社会関係からの離脱、稼得能力の喪失による経済状態の悪化は、依存性の増大を意味するものであったが、じつはこれらの傾向はすべて、孤独感の増大傾向とも一致しているのである。すなわち、生活構造における依存性の増大は、生活意識における孤独感の増大とパラレル

であり、さらに次に述べる老人としての自己意識とも関係してくるのである。

「何歳ぐらいから老人だと思いますか」という質問の回答結果に、回答者自身の年齢をクロスさせなければ、自分を「老人」と意識しているか否かの判断結果を得ることができる。これをここでは「老人意識」と呼ぶことにするが、この結果を他の項目とクロスさせることによって、自分を老人と意識させる要因としては何があるかを分析しようとするのが以下の分析の狙いである。

先の「何歳から老人だと思うか」という問いに対しては「70 歳ぐらいから」と答えた人が最も多く全対象者の 39.4%、次は「65 歳ぐらいから」で 23.0%、3 位は「60 歳ぐらいから」で 12.9%、以下「75 歳ぐらいから」「55 歳ぐらいから」の順となっており、「いちがいにいえない」と年齢をあげなかった人が 11.1% であった。これを回答者の年齢階級とクロスさせて男女別にみたものが表 18 である。男女をあわせた総数では「60

表 18 性・年齢階級別にみた「老人」とは何歳からか

(% 人)

		計	55 歳ぐ らい から	60 歳ぐ らい から	65 歳ぐ らい から	70 歳ぐ らい から	75 歳ぐ らい から	いちが いに いえない	不 明
計	総 計	100.0 (5,699)	0.8	12.9	23.0	39.4	6.3	11.1	6.5
	60 ~ 64 歳	100.0 (2,123)	1.1	13.2	25.1	39.5	4.9	10.9	5.3
	65 ~ 69	100.0 (1,539)	0.7	15.7	25.6	35.0	6.0	10.7	6.3
	70 ~ 74	100.0 (1,055)	0.6	11.7	21.5	42.9	7.4	10.7	5.2
	75 ~	100.0 (982)	0.6	9.5	15.8	41.9	8.6	12.8	10.8
	〈参考〉 30歳から 60歳未満の都民	100.0	2.2	32.7	28.9	31.0	2.3	2.9	0.0
男	計	100.0 (2,653)	0.8	10.3	21.6	40.5	7.7	11.9	7.2
	60 ~ 64	100.0 (998)	1.2	10.1	24.7	41.9	5.6	10.5	6.0
	65 ~ 69	100.0 (745)	0.4	12.3	23.2	38.6	7.1	11.4	7.0
	70 ~ 74	100.0 (491)	0.8	9.4	18.5	41.6	9.4	13.4	6.9
	75 ~	100.0 (419)	0.7	7.9	15.0	40.3	11.5	14.1	10.5
女	計	100.0 (3,046)	0.8	15.3	24.1	38.2	5.2	10.5	5.9
	60 ~ 64	100.0 (1,125)	1.0	15.9	25.3	37.5	4.4	11.2	4.7
	65 ~ 69	100.0 (794)	1.0	18.8	27.8	31.6	5.0	10.1	5.7
	70 ~ 74	100.0 (564)	0.4	13.7	24.1	44.1	5.7	8.3	3.7
	75 ~	100.0 (563)	0.5	10.7	16.3	43.2	6.4	11.9	11.0

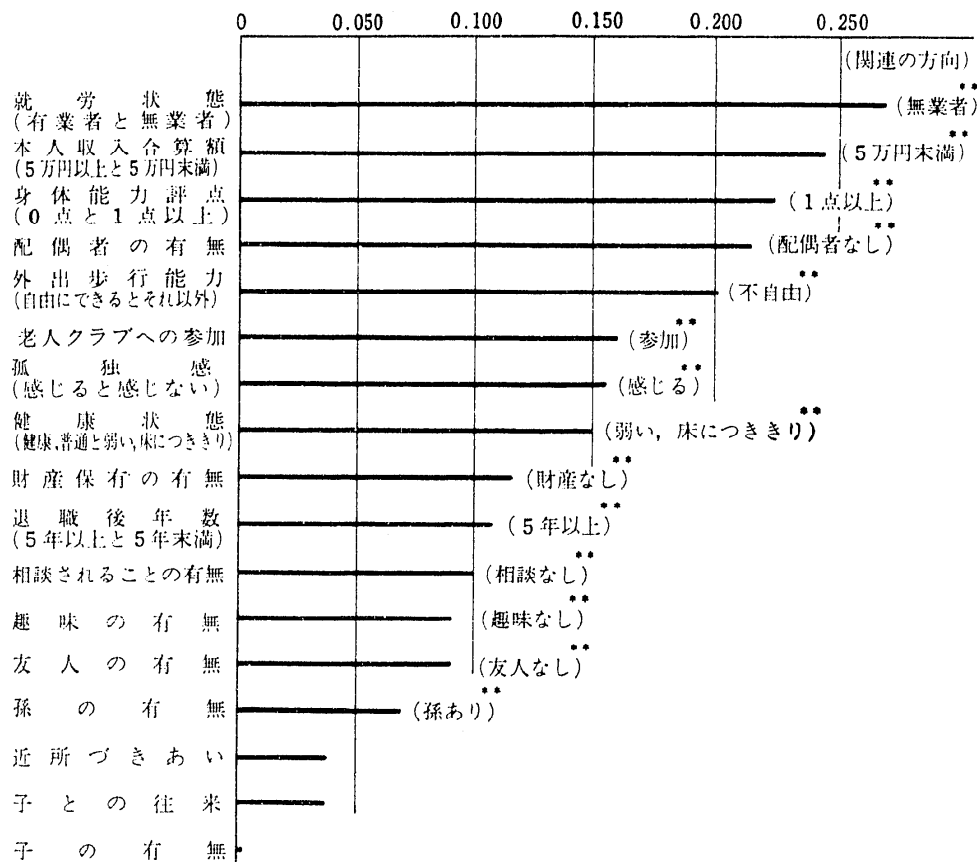
〈参考〉 「老後に関する意識調査」(昭和 46 年 12 月, 東京都民生局)。

「64歳」の年齢階層の人では老人というのは65歳ぐらいから以降のことで、したがって、自分をまだ老人と意識していない人は69.5%、老人というのは60歳ぐらい、あるいは55歳からのことをいい、自分はすでに老人のグループに意識していると考えられる人は14.3%、年齢ではいちがいに決められないとする人は10.9%、そして残り5.3%は不明であった。「65～69歳」の人では、70歳以上を老人と考えている人(自分を老人と意識している人)は41.0%、65歳以下が老人と考えている人(すでに自分を老人と意識している人)は42.0%、どちらともいえないという人は10.7%と、この年齢層では自分を老人と意識している人と意識していない人がほぼ同比率である。「70～74歳」では76.7%の人が自分を老人と意識し、7.4%の人がまだ老人でないとし、どちらともいえないという人が10.7%である。「75歳以上」では76.4%が自分を老人と意識し、12.8%はいちがいにいえないとしている。このようにみると「65～69歳」の年齢階層の人では、自分を「老人」と意識する

か否かがほぼ同数で伯仲しているが、この年齢以前では自分を老人と意識する人は少数で、これ以後では逆に多数となる。そして、一般に、自分の年齢が若ければ若いほど「老人」と意識する年齢を低く考えている。「60歳未満」の人では、老人は「60歳ぐらいから」とする人が32.7%もいるのに対し(参考欄参照)、「60～64歳」では13.2%、「65～69歳」ではややふえ15.7%であるが、「70～74歳」では11.7%、「75歳以上」では9.5%となっている。そして自分の年齢階層が高くなれば「老人」と考える年齢をより高年にシフトさせているのである。

また男女別では、男より女のほうに低い年齢階層を「老人」とする傾向がある。男では「60歳ぐらいから」の者を老人と考える人は10.3%であるのに対し、女では15.3%、「65歳ぐらいから」は男では21.6%であるのに対し、女では24.1%となっており、回答者の年齢階級とコントロールしてみてもこの傾向は変わらない。この差の要因としては、配偶者との年齢差、社会的活動へ

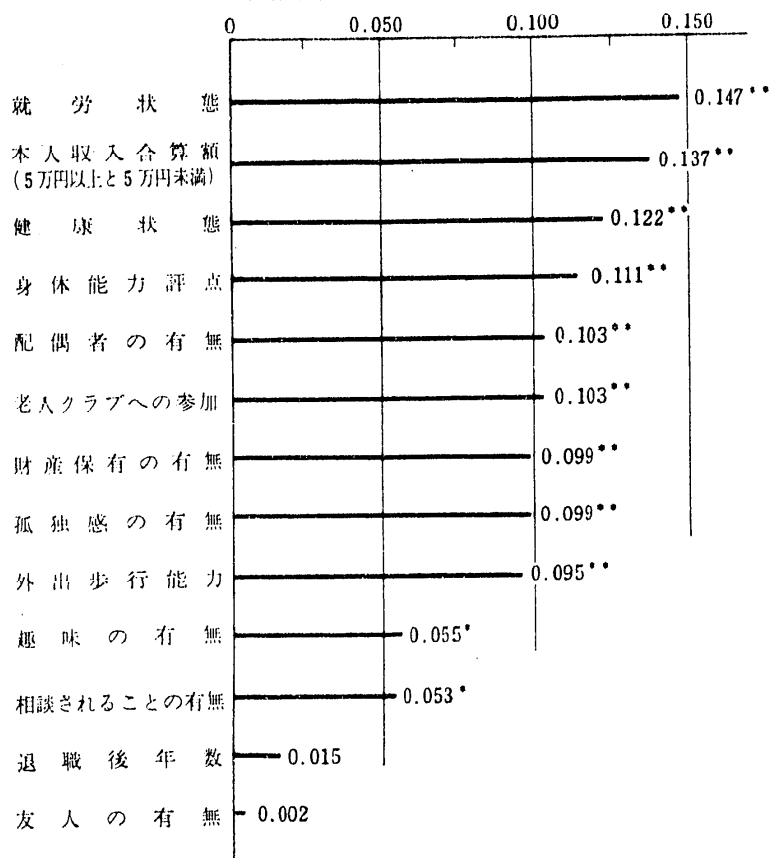
図12 老人の意識と関連する項目と関連の強さ
(4分点相関係数による; 全サンプルの場合)



(注) *** χ^2 検定で 1% 水準でみて関連あり

無印 χ^2 検定で 5% 水準でみて関連なし

図 13 老人の意識と関連する項目と関連の強さ
(4 分点相関係数による 65~69 歳の場合)



(注) **... χ^2 検定で 1% 水準でみて関連あり
* ... χ^2 検定で 5% 水準でみて関連あり
無印... χ^2 検定で 5% 水準でみて関連なし

の参加度、家族関係、健康状態等の生活構造の男女における差によるものと考えられるが、きわめて興味深い結果といえよう。

さてこのようにして得たデータを自分を老人と意識しているグループ、意識していないグループ、どちらともいえないというグループの3分類にまとめ直したものが表 19 である。この「老人意識」を被説明変数として、生活構造の指標となる諸要因にどのように関連しているかを次に分析してみたい。

「老人意識」と他の説明変数との関連度の標識として、ここでは「4 分点相関係数⁸⁾」を用いた。この係数は 2

表 19 老人意識の年齢別構成 (% 人)

		計	60~64 歳	65~69 歳	70~74 歳	75歳 以上
計	老人と思う	100.0 (2,508)	12.1	25.8	32.2	29.9
	いちがいにいえない	100.0 (635)	36.4	26.0	17.8	19.8
	老人と思わない	100.0 (2,185)	67.5	28.9	3.6	—
男	老人と思う	100.0 (1,042)	10.8	25.7	33.2	30.3
	いちがいにいえない	100.0 (315)	33.3	27.0	21.0	18.7
	老人と思わない	100.0 (1,106)	65.1	30.7	4.2	—
女	老人と思う	100.0 (1,466)	13.0	25.8	31.6	29.6
	いちがいにいえない	100.0 (320)	39.4	25.0	14.7	20.9
	老人と思わない	100.0 (1,079)	70.0	27.0	3.0	—

8) 4 分点相関係数の計算式; 2×2 のクロス表について実数を図のようにかくと 4 分点相関係数 $r = \frac{(AB)(\alpha\beta) - (A\beta)(\alpha B)}{\sqrt{(A)(\alpha)(B)(\beta)}}$, 詳しくは安田三郎著、『社会統計学』(1969年, 丸善)の 1.3 属性相関の章参照のこと。

分的属性に用いられる係数であるので、「老人意識」を「老人と思う」と「いちがいにいない」+「老人とは思わない」の2カテゴリーとし、他の説明変数も図12の()に注記したようなカテゴリーの変数とした。

先にみたように老人意識は年齢と強い相関があるので、全サンプルについて係数を求めた場合、関連の強さが年齢の影響をうけ過大に表れるので、年齢をコントロールして、関連度をみておく必要がある。そこで老人意識の有無の比率が伯仲している。「65～59歳」の年齢階層について関連度をみることにした。全サンプルについては図12、「65～69歳」の年齢階層については図13にその結果を掲げた。

老人意識と強い関連を持つ変数は、図の通り、就労状態、稼得の状況、健康・身体能力の状況、家族および社会関係等、生活のあらゆる側面にわたっている。自分を老人と意識するか否かは生活構造のそれぞれの要因がからみあっていることが知られる。特にそのなかで、就労をしているか否か、本人の収入額、身体能力および健康状態、および配偶者の有無が事わめて関連が強い。これらの項目は先号で述べた老人の生活構造における依存性を表す指標である。有業者よりは無業者が、収入の多いものよりは少ないものが、身体能力に低下をきたしていない人よりは低下している人が、健康状態の良好な人よりは、悪化している人が、配偶者が有る人よりも無い人が自分を老人と意識するのである。

これは生活の依存度が増すに従って自己を「老人」とみなすということの意味している。依存度の増大というのは生活における活動量の低下を意味するものである。そしてこれと関連し、趣味の有る人よりは無い人が、そして孤独感が無い人よりは有る人に老人意識を持った人がふえるのである。

このように生活構造の依存性が、老人としての意識を規定しているのが明らかにされたのであるが、この点は本調査におけるきわめて重要な発見であるといえることができる。

以上「昭和46年東京都老人福祉基礎調査」から得られた知見をもとにして老人の生活構造の特質について述べてきた。本稿での記述はクロス集計をもととしたデータ操作としては水準の低い方法であったが、さらに多変量解析の諸手法を適用して、以上述べたファクト・ファインディングスをより明確に、さらに一般的な命題化を試みる必要がある。また生活構造の階層性についても触れたが、依存性の概念を手掛りに老人の類型化の試みが必要であろう。このような基礎のうえにはじめて、老人の生活構造の科学的な把握が可能であり、社会問題としての老人問題の意味がつかめるのである。そしてより適切で有効な老人への社会サービスの諸施策のデザインが可能となるのではないだろうか。

執筆 者 紹 介(執筆順)

まつもと	せいじ	鉄道弘済会理事
松本	征二	
たかはし	たけし	ILO 東京支局次長
高橋	武	
むらかみ	きよし	日本団体生命保険(株)営業第3部長
村上	清	
すみだ	ゆたか	同志社大学教授
角田	豊	
よしだ	ひでお	法政大学教授
吉田	秀夫	
じめし	しげよし	社会保障研究所研究第2部長
地主	重美	
まえだ	まさひさ	厚生省統計調査官
前田	正久	
R.P.ドーア		イギリス・サセックス大学教授
まちだ	としひこ	東京大学大学院経済研究科研究生
町田	俊彦	
たかはし	ひろし	社会保障研究所研究員
高橋	紘士	